NEXUSYS 11 / BOOK VII

第9章 他者の記憶

01 — 記憶の部屋

その部屋には画面が一つもなかった。クロノスが最初に気づいたのは、それだった。

病院の最も古い棟の奥にある細長い部屋には、椅子が三脚と診察用の照明、それに紙の封筒でいっぱいの書類棚が置かれていた。収集物を維持してきた医師は、持ち主が眠っているあいだに記録を書き換えられるような機器を信用していなかった。病院が情報システムを更新したときも、この部屋だけはネットワークから切り離されたままだった。

レイチェルは《リード、D――同意履歴》と書かれた封筒を開いた。内側の封印にはまだ触れない。

「何を覚えていたかを聞く前に、何に同意していたのかを確かめるべきよ」

クロノスは向かいに座り、足を椅子の下へ引き寄せた。ロイは入口で待っていた。誰かを守ることと、その人が外へ出られなくすることの違いを、ようやく見分けられるようになっていた。

「記録された個体は複数あります」とエイドリアンが説明した。「自分をダニエル・リードと名乗る者もいれば、名を告げない者もいる。ダニエルの記憶を受け取った別人だと言う者もいる。どれが正しいか、この資料だけでは決められません」

「じゃあ、なぜここに？」とクロノス。

「そのうちの一人が、二度とされたくないことを書き残しているからです」

彼らは一緒に封筒を開いた。最初のページにあったのは告白ではない。焦げたコーヒーの味、いつもきちんと閉まらない研究室の窓、実験に失敗するたびJ・F・セバスチャンが繰り返した冗談。そんなありふれたものの一覧だった。その下にダニエルは小さな文字で警告を書き加えていた。

《記憶は、それを作った人物を伴わずとも、損なわれないまま届くことがある。》

クロノスは三度読み返した。大人たちは誰も、その言葉に説明を付け足そうとしなかった。

02 — タイレル社の一室

事故以前のダニエルを、レイチェルは知っていた。まだ彼が、正しい議論をすれば企業もまっとうな人間のように振る舞うと信じていたころだ。ダニエルは、小さな人工臓器や精巧な発生模型が並ぶ作業台でセバスチャンと働いていた。ダニエルは臨床的で厳

密だった。一方のセバスチャンには、作ったものすべてを誰かに紹介すべき相手のように扱う癖があった。

レイチェルの記憶の中で、ダニエルは背が高く、不器用で、いつも鉛筆を探してポケットをまさぐっていた。彼は、彼女の好みが移植されたものかどうか試すことなく、何が好きか尋ねた。当時は妙に丁寧な人だと思っていた。今は、その礼儀の意味が違って分かる。

「窓を開けたいか聞いてくれたの」とレイチェルはクロノスに話した。「研究者たちは、普通は私の代わりに決めていた。ダニエルは尋ねてくれた」

「知っていたの？」

「何を疑っていたかは分からない。でも、それを理由に私を見せ物にはしなかった」

封筒の中の写真には、空のカップが三つ置かれた昼食のテーブルが写っていた。余白にはセバスチャンの筆跡がある。四つ目の椅子は画面の外だ。日付はダニエルがタイレル社を去る前のものだった。

クロノスは写真そのものではなく、透明な保護袋に触れた。

「このテーブルを覚えてる。でも、上から見ていた記憶なんだ。ほかの誰かがここで食事するのを見ていたみたいに」

レイチェルは、その記憶は間違っていると言いかけて思いとどまった。再構成によって視点が変わることもある。普通の人間の記憶でも同じだ。この妙な角度だけで証明できることは何もない。

「誰が撮った写真か調べられる？」

「調べてみましょう」と彼女は答えた。「追いかけるかどうかも、あなたの問いよ」

ロイは、少年が写真を見つめる様子を見守った。キルスイッチの審問以来、クロノスが許可を求めるような顔をせずに笑ったのは初めてだった。

03 — 借り物の夏

二つ目の封筒には、後年の身体再建時に収録された聞き取り記録が入っていた。被験者は海辺の夏を語っている。袖についた潮の塩、ちいさな舟をめぐって口論する二人の兄弟、台所から呼びかける母親の声。聞き手はそれをダニエル・リードの幼少期を裏付ける証拠として分類していた。

エイドリアンが元の提供者台帳を探し当てるのに、一時間もかからなかった。その夏はエリアス・モーレンという技師のものだった。人工海馬接続装置を安定させるため、彼の感覚記憶が使われていたのだ。モーレンは限定的な治療研究には同意していた。しかし、自分の幼少期を他人の身元証明に使うことには同意していなかった。

「モーレンは生きていたのか？」とロイ。

「移植当時は。後の記録は不完全です」

クロノスは気分が悪そうだった。「あの舟を覚えているんだ」

「なら、あなたが経験している記憶としては本物よ」とレイチェル。「でも、その舟があなたのものだったという証拠にはならない」

その区別は簡単に聞こえた。だが、その残酷さを考えれば簡単ではなかった。会ったことのない他人の悲しみを抱え、訪れたことのない故郷を恋しがることがある。愛情を本当に感じていても、最初に誰がその愛情を形づくったのかは分からないのだ。

「返したほうがいい？」とクロノス。

「出どころが違うからって、覚えたことを忘れることはできない」とロイ。

「でも、モーレンが秘密にしてほしかったなら――」

「なら記録が公にならないよう守る。お前が受け取ってしまったことを罰する必要はない」

エイドリアンは提供者を特定できる情報を封印した。評議会には、受け継がれた私的記憶に関する規則が必要になるだろう。資料庫は拒否の意思を保存することを教えてくれた。しかし、借り受けた優しい思い出にどう責任を負うべきかは、まだ教えてくれて

いなかった。

04 — 自分自身の目録

クロノスは、自分の目録は自分で作ると言い張った。紙に三本の欄を引き、《覚えている》《検証できた》《不明》と記した。最初の欄はすぐ埋まった。二番目はなかなか進まない。長く持ち続けてきた記憶の多くは三番目に残った。

自動車が衝突した瞬間を覚えている。だが、視点はダニエルが座っていた座席からのものではない。病院の手すりを覚えている。傷の位置はケース71号のものと一致した。《指揮系統の停止完了》という言葉を聞いた記憶もあった。しかし軍は、その言葉が発せられたときに患者が意識を持てたはずはないと主張していた。

ヌルは、証拠に許される範囲を超えたことを断言せず、日付を照合した。現在の少年型身体が組み立てられる何年も前のリハビリ記録に、同じ記憶が一つ出てきた。別の記憶は、リード計画とは無関係の介護者が最初に記録していた。

「僕だけのものは、一つもないの？」とクロノス。

「今日お前が下した選択は、お前だけのものだ」とロイ。

「答えが分からないときに、大人が言いそうなことだね」

「そのとおり」とロイ。「でも、本当のことでもある」

クロノスは《検証できた》欄の下に書いた一行を消した。そして古い資料を必要としない文章を書いた。

《僕は自分で記録を読むことを求めた。僕はここに残ることを選んだ。》

レイチェルはその紙を持っておくよう勧めた。少年は折りたたみ、上着のポケットに入れた。資料庫には、いくらでも説得力のある歴史を組み立てられる資料があった。しかし、この部屋のこの午後に彼自身が作ったものは、どの資料にもなかった。

外の広場では病院の接収命令に対する抗議が続いていた。そこに集まった人々には、クロノスとは別の理由もあった。脅かされる患者、高額な治療、民間契約。彼は窓辺に立って眺めた。世界は、彼の起源が確定するまで止まってはくれない。

05 — 不在の人物

生存しているモーレン家から返事が届いた。エリアスの娘はクロノスに会いたくないという。幼少期の録音の由来を調査員が確認することは認めたが、写真、住所、声を公の審問で複製しないよう求めていた。

クロノスは黙って手紙を読んだ。そして、受け取った旨を短く伝えてほしいとレイチェルに頼んだ。自分が選べる立場になる前に行われたことについて、娘に許しを求めることはしなかった。

一方、エイドリアンは矛盾する法的記録を見つけた。何世代もの再建された身体が、ダニエル・リードの代替身体として登録されていたのに、任意の二体の間に人格の連続性があると認めた独立審問は一度も開かれていなかった。製造企業は移行を保守作業として扱った。保険書類では一連の死亡事故とされている。その後、軍の採用記録は最も新しい個体を新規製造した資産として扱っていた。

「都合に合わせて答えを変えていたのね」とレイチェル。

「しかも、どの答えでも本人には聞いていない」とロイ。

クロノスは最後の契約書を端で持ち上げた。患者の署名欄は空白だった。その下では企業の代表者が、作戦上の保存を優先するため同意があるものと推定すると認証している。

「ダニエルが同意したか、分かる？」

「最初の事故後、緊急治療を承諾したことは分かります」とエイドリアン。「しかし、その許可が後のすべての再建に及んだかは不明です。残っている拒否の記録からすると、及んだものと考えるべきではありません」

クロノスは契約書を置いた。「なら、僕はその契約まで引き継ぎたくない」

ロイは怒りを予想していた。少年の静けさのほうが、むしろ恐ろしかった。それは、他人に何を奪われたのかを正確に理解した人

間が、ふと見せる静けさだった。

06 — 知らないことを選ぶ

独立資料管理官は最後の処置を提案した。厳重に管理された条件下で休眠中の神経基盤を調べれば、自伝的な記憶の断片を追加で取り出せるかもしれない。ただし、その処置は素材の一部を破壊する。以前の人物についての証拠が得られる一方、その人物に関する将来の検査の可能性は失われるのだ。

一同は静かな診察室に集まった。その選択を元に戻せるふりをする者はいなかった。

「僕のものなら知りたい」とクロノス。

「もし、さらなる再建を拒否した誰かのものなら、その意思も守らなければ」とレイチェル。

ヌルが保存の履歴を示した。元の同意条件は損傷していたが、残存する行には、不可逆的な介入の前に独立した証人を立てることが明記されていた。その証人は一度も任命されていなかった。

「じゃあ、やらない」とクロノス。

エイドリアンは、審査が終わるまで資料庫で試料を保護できると説明した。何年ものあいだ答えが出ないかもしれない。

「答えがなくても生きられる」と少年は言った。少し間を置き、続けた。「そういう生き方を覚えようとしてる」

ロイは褒めなかった。知らずにいることには本当の代償がある。それを容易なことのように語る権利は、彼にはなかった。

棚は施錠された。イマニ医師が封印に副署した。クロノスも彼女の隣に自分の名を書いた。ダニエルの相続人としてでも、昔の軍の台帳にある財産としてでもない。自分の拒否の意思を保存されるべき、利害関係を持つ一人として。

警報は鳴らず、機械も止まらなかった。部屋の見た目は入ったときとほとんど変わらない。それでも初めて、この部屋には未来の調査員が沈黙と取り違えることのできない決定が残された。

07 — 存在しなかった記憶

日没後、病院の独立した時刻台帳に説明のつかない細部が現れた。それは映像でも声でもない。暫定憲章の終わりに受信された謎の通信と、まったく同じ時間帯に、封印された部屋の機械式時計が二秒間停止していた。ネットワークに接続されたことのないカメラのフィルムにも、その停止が写っていた。

ヌルはカメラの駆動装置を検査した。ベクターは保守履歴を照合した。どちらも改竄の痕跡を見つけられなかった。しかし、どちらもその異常を人類の技術より古い知性の証拠だとは宣言しなかった。

クロノスは停止した一コマを見つめた。「この時計が止まったこと、覚えてる」と言った。

「その部屋にいたのか？」とロイ。

「ううん。しかも、この写真を見るまで思い出さなかった」

これは新しい種類の危険だった。調査員がきっかけを与えたあとに生まれた記憶をすべて信じてしまえば、暗示だけで謎はいくらでも膨らんでいく。レイチェルは、情報を見た後の記憶は独立した証言にはならないと説明した。少年はしぶしぶ認めた。

「僕が作り話をしてるとしたら？」

「その可能性も記録するの」とレイチェル。「そして、実際に確かめられるものを調べ続ける」

資料管理官は、時計の異常とクロノスの記憶を別々に記録した。互いが互いを裏付ける材料にはしない。エイドリアンは、時計の最も古い物理部品を独立した検査機関で年代測定することを提案した。その部品はダニエル・リードの事故よりずっと後に設置されたものだった。だからこそ時刻の異常は、単純になるどころか、いっそう解釈しにくかった。

ロイは元の言葉を思い出した。《WE WERE NEVER YOUR CREATION——私たちは、あなたたちに創られた存在ではない》。誰が送ったのかは依然として分からない。だが、その意味を誰も理解しないまま、通信の影響はすでにこの部屋へ入り込んでいた。

08 — 今日、自分のものになったこと

病院を出るころ、雨が降り始めた。市は公共の階段を照らせるほど電力を回復し、作業員が評議会棟の下の手すりを交換していた。一人がロイに気づいたが、声をかけなかった。今夜ばかりは、そっとしておいてもらえるのがありがたかった。

クロノスは公共の給水栓のそばで立ち止まった。本人確認の記録がなくても支援を求められる方法を説明する真鍮の板を読んだ。それからカップを借り、水を注いで飲んだ。

「それもダニエルの記憶か？」とロイ。

クロノスは考えた。「ううん。五秒前の僕の記憶だよ」

レイチェルは小さく笑った。彼女は一日中、他人の人生についての記録を調べ続けていた。そして今、ありふれたカップに水が注がれる音を聞いて、胸をなで下ろしている自分に気づいた。

エイドリアンが資料庫から最後の報告を伝えてきた。時計の最も古い部品には、すでに廃止された天文台の製造者印があった。人類以前の起源を証明するものではない。ただ、実在する調査先が一つ得られた。設置記録には一か所奇妙な点があった。その装置を徴用したのはタイレル社でもヘリックス社でも軍でもなく、名称の欄が空白になっている組織だった。欠落が損傷によるものか、秘密保持のためか、あるいはもっと奇妙な何かによるのかは、まだ確かめられていない。

「また名前が消えている」とロイ。

「今回は実際の書類の、実際の空欄です」とエイドリアン。

クロノスは、そこへ行くのかと尋ねた。ロイは、証人も正式な記録も用意すること、望めば途中で帰れることを告げた。少年はうなずいた。

角を曲がるとき、レイチェルは病院を振り返った。窓の向こうには、起源についての壮大な理論などなくても人生に価値のある人々がいた。明日、評議会は彼らの権利を審査する。今夜、彼らは温かい場所で生きている。

クロノスは二人と並んで歩いた。ポケットには二つの文を書いた紙が入っている。

《僕は自分で記録を読むことを求めた。僕はここに残ることを選んだ。》

その記憶がどんな歴史を経て彼の中へやって来たにせよ、その言葉は彼自身のものだった。

――第9章 終